# ２０２６年度　タイ・カセサート大学

# 単位互換プログラム１０月報告書（9/19~10/31）

獣医学群獣医学類　５年　高橋亜未（Ami Takahashi）

**第１週　〈Pathology unit〉**

第１週は、血液学や病理学を中心とした実習を行いました。血液塗抹標本と血球計算の結果から血液寄生虫の有無を診断する課題に取り組み、牛や馬の臨床病理症例についても学びました。特に馬のピシウム症は、日本ではあまり見る機会のない疾患であり、興味深く感じました。

また、アヒルの剖検なども行い、腫脹していた足の原因を調べました。検査の結果、細菌感染が疑われ、肝臓、脾臓、腎臓にはアミロイドーシスが認められました。さらに、免疫組織化学染色や PCR などの検査手法も経験しました。PCR では 3 検体中 2 検体で正しい診断ができ、正確な診断のためには複数の検査方法を組み合わせることが重要であると学びました。一方で、PCR はコンタミネーションによって結果が大きく変わる可能性があり、慎重な操作が必要であることも実感しました。



雨季は道路の冠水が日常茶飯事だそう。。。



学食とてもおいしいので日本食は全く恋しくなりません:)

**第２週〈Swine unit〉**

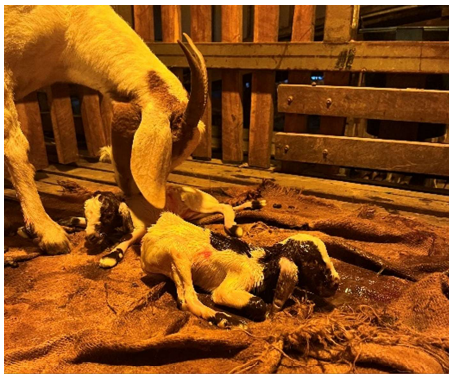
第２週は豚の臨床実習を行いました。初日にはアフリカ豚熱の影響を受けた養豚場を訪問しました。以前は約 1,000 頭を飼育していた農場が、感染症の影響によって約 100 頭まで規模を縮小していました。農場のバイオセキュリティは十分とはいえず、健康状態の悪い豚も確認されました。今回の訪問を通して、感染症対策や衛生管理の重要性を改めて認識しました。

翌日には別農場の 15 週齢の雄豚の剖検を担当し、解剖手順や病変を関連付けて疾病を診断する方法について学びました。その後、病歴の確認や農場主への聞き取り事項について検討し、検査室では in situ hybridization の実習にも取り組みました。しかし、染色では十分なシグナルが確認できず、プローブ濃度などの条件設定が結果に大きく影響することを学びました。
最終日の発表では、初日に訪問した農場の問題点と改善策について議論しました。感染症予防が重要であると理解していても、経済的な理由や過去に発生経験がないことなどから、対策に積極的でない農家も存在します。獣医師には疾病の診断や治療だけでなく、農家との信頼関係を築き、適切な衛生管理について分かりやすく指導する役割も求められると感じました。

**第 3 週〈Equine unit〉**
第 3 週は馬の臨床実習を行いました。馬の保定方法や身体検査、超音波検査の基本を学び、実際に入院中の馬の症例を見学しました。特に、唾液腺付近に発生したメラノーマの症例が印象に残りました。腫瘤の生検では黒色の液体が確認され、メラノーマである可能性について検討しました。また、去勢手術も見学し、全身麻酔下で仰臥位にして実施する方法を初めて経験しました。
症例発表では、メラノーマの治療方法について議論し、オゾン療法という治療法についても学びました。伴侶動物領域では使用されることがある一方、大動物領域での有効性を示す十分な根拠はないことを知り、新しい治療法を大動物医療に取り入れる難しさを体感しました。
週末にはチャトチャック市場やシリラート医学博物館を訪れました。

**第 4 週〈Ruminant unit in Nong Pho〉**
第 4 週は、Nong Pho で反芻動物の臨床実習をしました。牛の繁殖検診では、直腸検査による卵巣の触診や人工授精の適期判断について学びました。また、重度の乳房炎症例を見学し、乳汁中の異物や高熱などの症状から原因菌を推測しました。その後の経過観察では、症状の改善状況を確認しながら追加の治療を行いました。特に、Streptococcus uberis による乳房炎は日本でみた経験がなく、タイでよく見られる病原体について知る貴重な機会となりました。
さらに、飼料変更によるルーメン鼓張症や、後肢麻痺を呈した子牛、難産の症例なども経験しました。難産の症例では、胎子がすでに死亡しており、最終的に牽引によって娩出しました。この症例では、農家が妊娠日数を把握しておらず、来院も遅れていたことが問題でした。農家に対して妊娠牛の管理方法や分娩時の異常徴候について教育することの重要性を学びました。
また、タイでは宗教的・文化的背景から安楽死が日本と比べてあまり行われないことを知

り、動物の苦痛や QOL について考える機会にもなりました。
週末にはパタヤを訪れ、アジアのサグラダファミリアとも言われている Sanctuary of Truth という博物館を訪れ、仏教の教えやタイの建築に触れることができました。



往診に行ったらたまたま見れた山羊の出産！



農家さんと写真撮影！



パタヤの Sanctuary of Truth

**第 5 週〈Exotic unit〉**

第 5 週はエキゾチックアニマルの臨床実習を行いました。ウサギの保定方法や一般的な疾患、身体検査、鼻涙管洗浄などを学び、野生動物への麻酔に使用する吹き矢の練習も行いました。また、リクガメの身体検査や筋肉内・皮下注射、尾部からの採血を経験しました。カメの皮膚は想像以上に硬く、採血の難しさを実感しました。
フクロウの診察では、翼や爪に外傷を負った個体の治療について学びました。治療後の個体は大学キャンパス内に放野されると聞き、野生動物の保護活動について理解を深めました。また、野生のイノシシの牙が目の下の皮膚に食い込んだ症例では、全身麻酔下で牙を切り落とす処置を行いました。タイでは野生動物をペットとして飼育する人もいますが、適切な飼育知識が不足している場合もあり、動物福祉や法規制の重要性を感じました。
さらに、観光施設で飼育されているゾウの超音波検査や採血も経験しました。ゾウの体は非常に大きく、超音波検査では一度に観察できる範囲が限られていました。妊娠 20 か月

のゾウの胎子を観察する機会もあり、貴重な経験となりました。
週末にはプーケットを訪れ、シミラン諸島でのシュノーケリングや自然を楽しみました。



ゾウの採血



カメの採血



北大生とハンガリーから来た学生と一緒にプーケットのシミラン諸島にいきました！

**第 6 週〈Ruminant unit in Kamphaeng Saen〉**

第 6 週は、2 回目の反芻動物臨床実習を行いました。農場訪問ではルーメンアシドーシスや乳房炎、白線病などの症例を経験しました。ルーメンアシドーシスの治療では、健康な牛から採取したルーメン内容物を患畜に移す方法を初めて見学しました。また、白線病では患部の蹄を削る処置を行いましたが、農家の経済的な事情から十分な処置ができない場合もあることを知りました。
反芻動物ではありませんが、豚の去勢手術を見学し、麻酔を使用せずに処置が行われており、動物が強い痛みを感じている様子を目の当たりにしたことは非常に衝撃的でした。
さらに、トラックから転落して大腿骨を骨折し、犬に咬まれた豚の症例も印象に残りました。受傷から約 10 日間適切な治療を受けておらず、患部には重度の炎症が認められました。この症例を通して、動物を生かし続けることが必ずしも動物福祉につながるわけではないと感じました。獣医師には治療だけでなく、動物の苦痛や生活の質を考慮し、何がその動物にとって最善なのかを判断する責任があると改めて考えさせられました。